
魔法少女リリカルなのはStrikers ~ 血塗られし王 ~

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 血塗られし王

【Nコード】

N8869U

【作者名】

大喰らいの牙

【あらすじ】

ある男と女は恋人同士で将来結婚するつもりだったが女は管理局の闇をってしまったがゆえ、殺される。

男は殺された真実を知った時、管理局に復讐することを心に決める。

キャラ設定（前書き）

なのはで一作品書きました。

色々と誤字脱字が酷いかもかもしれませんが許してください。

キャラ設定

キャラ設定

名前 神海 鯉斬 (しんかい こうき) 27歳
出身地 第97管理外世界「地球」の「七深」出身
所属 地上部隊 一等陸佐 (一応魔導師でもある。)
魔力SS+ (条件を満たすとSSSになる。)
魔導師ランクSS (条件を満たすとSSSになる。)
陸戦 SS+ 空戦 SS+
魔力変換 水、風、氷の三種類
デバイス ベルカ式インテリジェントデバイス
デバイスの名は「ジョーカー」
形態はチェーン型。

魔力光 深蒼

好きな物 鮫 海が見える丘 船 冴姫の笑顔

主人公のイメージは「デュラララ」の静雄をイメージだけど髪の色は銀。

体の方も静雄と一緒。

脚にはエア・トレック。

だけど、カカトにショットガンが付いてる。(ベヨネッタみたいなやつで撃ち出すのは魔力弾)

走っている道は「血痕の道」、「嵐の道」。

だが、事情により本来は「嵐の道」が使えないため「風の道」を代用している。

基本、「血痕の道」で済みます。

特殊武器

特殊スナイパーライフル「パルチザン・ランチャー」
三枚刃のプラズマカッターが二つと三本のプラズマ刀「グラン・ス
ラッシュリッパ」
四十五口径シールドバンカー「リボルビング・ステーク」
ベアリング弾「レイヤード・クレイモア」

BJの色は蒼と黒。

イメージは「マトリックス」のネオ達が着ている感じの服装。

裏設定

なのは達よりも早く恋人と一緒に管理局に入っている。
だけど、七年前、結婚する前に恋人が謎の死を遂げた。

恋人の死の真相を知ると同時に管理局の闇の部分を知り、恋人を死
に追いやった上層部と最高評議会を潰す決意する。

レジラスとは上司部下の関係だが計画の仲間であり、酒飲み仲間
でもある。

しかも、スカリエツティとは昔からの友人関係で管理局を潰す計画
に参加しないかと話を持ちかけた。友人のサラ・コーディアとここ
ちら側に着いた。

そのため、レジラスとジェイルとはメツチャフレンドリーです。

たまに、三人と飲みに行くときもある。

ティアナの兄とは先輩と後輩の関係。主人公が先輩でティータは後
輩。

ナンバーズに対しては妹みたいな存在に近い。

恋人が死んだ時、体の中に海竜神レヴァイアサンを宿す。

FFの召喚獣のようなやつではなく「エア・ギア」を見ている人な
らわかると思います。アギトの技影シャドウ、つまり巨大な鯨のイメージ

です。

解放時には鮫の特性が使えます。

- ・ 血の匂いに敏感になります。
- ・ 全身を魔力で包みこみ、鮫肌みたいに触れた相手を傷つける。
- ・ 鮫が狩りを行う様に音もなく姿を消し、敵を喰らい尽くすことができる。

キレると人間クレーターができます。というか人が空中で舞います。禁句をいうと殲滅神が降臨、その辺にあるものを武器に暴れます。

はっきり言っておきます、ガチアンチです。なんせ管理局を潰しに掛かりますからね。

あと、復讐が終えたら、ジェイルとレジアスの罪を被り死ぬつもりです。

死ぬかどうかはなのは達にかかってます。

恋人

名前 神無月かんなつき 冴姫さき 19歳のときに最高評議会と上層部の手によって残酷に殺される。

出身地 第97管理外世界「地球」の「七深」出身

所属 地上部隊 二等陸佐

魔力 A

魔導師ランク S+

陸戦 A+ 空戦 S

魔力変換 雷、炎の二種類

好きな物 海が見える丘 鯉斬の寝顔

人物像のイメージは「東方」の聖 白蓮。キヤーナムサーン

おっとりしてるけど、頭がよく物事をよく見ている。
だが、管理局の闇を知ってしまった為か鯨斬に知らせる前に殺され
る。

だけど、鯨斬にしか分からないメッセージを残して逝った。
サラとは買物友達であり愚痴を言い合うこともある。
レジラスとも顔見知り。

友人

サラ・コーデリア 26歳 女性

出身地 第97管理外世界「地球」の「七深」出身

所属 地上部隊 一等空佐

魔力 A+

魔導師ランク A+

陸戦 A+ 空戦 S+

鯨斬と冴姫の同僚。

よく三人でつるんでいた。飲みに行ったりもしてたりしていた。休
日の日には冴姫とショッピングに行ったりしていた。

レジラスやオーリスとも知り合いである。

現在は鯨斬の上司のポジションである。

鯨斬から計画を持ち出された時は、迷った末戦闘はしないが情報を
流してもらう風に協力を頼んだ。

「危険と感じたら、すぐに身を引いて構わない」と鯨斬に言われて
いる。

ではちょっとだけ冒頭を入れようと思います。

プロローグ

「うおおおおおおおおおおおつ!!」
と一人の男は愛していた女の上で泣いていた。

愛していた女は箱にそれぞれ入っていた。頭と体がバラバラで顔は綺麗のままだったが、体の方は内臓が飛び出していた。それはとてつもなくグロテスクで目も当てられない状況だった。

友人のジェイルに頼って、綺麗に戻せないかと泣きながら頼んだがせいぜい首がくつつくぐらいで体の方は治らなかった。

「すまない、鯨斬なんとか首は元に戻すことが出来たが、体は・・・」

「いいさ、ジェイル。冴姫も首だけ戻っただけでも喜んでるよ。」

「これからどうするの?」

とサラが聞いてきた。

「地球に戻って、あの丘の上に墓でも作るさ。海を見るのが好きだったし。」

「そう」

といい、サラは帰って行った。

ジェイルはその後の行方不明となった。

これが七年前の出来事。

のちに鯨斬は管理局を潰す為にレジアスとジェイル、そしてサラとともに裏で暗躍する。

「上層部の連中に最高評議会・・・必ず喰らい殺す!!」

と呟きながら右手の薬指に銀の指輪をはめてミッドチルダに帰った。

キャラ設定（後書き）

長くなってしまった設定ですが、めげずにやっつけていこうと思います。
意見や感想があれば送ってください。
出来るだけ反映させます。

機動六課・・・か（前書き）

はい、出来ました。

スミマセン、本来ならもっと早く投稿しようと思ったんですが、三連休はずっとバイトで三日間で合計27時間働いたので、疲れて寝てました。

水分補給はこまめやったほうがいいですよ。

機動六課・・・か

「はやて side」

私は八神 はやて 二等陸士であり、部隊長や。歳は19やで
今日から機動六課が新しく動きだしたのにいきなりのピンチや・・・

「なんでや・・・？」

と一枚の書類を見ながら頭を抱える私。

とそこになのはちゃんとフェイトちゃんが二人揃ってやってきた。

「どうしたの？はやて（ちゃん）」

右から紹介していくで。

高町なのは 歳はわたしと一緒に19歳。一等空尉で戦技教導官
を務めてる。

管理局からは「エースオブエース」と言われているんや。

次にお隣に居るのはフェイト・T・ハラウオン 歳は19。三人と
も同い年や。

執務官の仕事をやっているんや。

とまあ二人の説明はこれぐらいにして、二人にも相談しよう。

「なのはちゃんにフェイトちゃん、この書類を見てくれる？」

「えっ・・・！」

「あっ・・・！」

そこには異動になった者の書類だった。今回地上本部勤務から一人
やってくるのだが、地上本部の人たちとは仲が悪く、管理局でも有
名である。

「機動六課がまだ軌道に乗ってないのに、地上本部からしかもあのレジアス中将の部下。明らかにスパイと疑いたくなるんやけど・・・」
「
そう普通なら疑うが、その書類に載っている人物は三人とも少なからず知り合いであった。」

「でも、この人がスパイなんてあり得ない・・・と？」

「そうなんや。」

「鯉斬さん・・・」

「なんで地上本部・・・しかも、レジアス中将の部下なんかやっておるんや。」

と悲痛な声だった。

三人は訓練校時代に一月ほどであったが教えてもらっていた。

「はやくside out」

「鯉斬side」

「来てやったぞ、レジアス」

「うむ、まあ、座れ。」

「お久しぶりです。」

「おう。って言っても、ほんの三日間空いただけだろ？オーリス」と軽い挨拶を済ます。三人。

上司であるレジアスを呼び捨てに出来るのは地上本部を探しても、この男、神海しんかい 鯉斬こじきただ一人だろう。

「で、書類の方は？」

「もうすでに送つといた。」

「そうか」

「これでようやく『計画』が最終段階に入る。」

「長かったな・・・」

「そうですね。」

とレジラスとオーリスは何かを思い出しながら、呟いた。

「なのはたちには悪いが利用させてもらう」

「そっぴやお前がこれから異動する『機動六課』なんだが、探ってみると色々裏があるぞ。・・・オーリス。」

「はい。これから鯉斬さんが向かう『機動六課』ですが、通称は『古代遺物管理部 機動六課』。ロストロギア関連の部隊ですね。部隊を立ち上げるために後見人になったのはリンディ・ハラウン、クロノ・ハラウン。そして、聖王教会のカリム・グラシアの三人となっております。」

と淡々と掴んだ情報を読んでいくオーリス。

「ここまでで、本局と聖王教会の支援を得るなんて権力がスゲーな。」

「続けます。この部隊のコンセプトは『最悪の事態が起こった場合に対応する部署の設立』だそうですが、他にも何か隠していますね。ここまででしか調べることが出来ませんでした。これ以上探るとあちらに勘付かれるので・・・」

「いや、大分分かった。礼を言う。オーリス。」

と答える俺。

・・・なんか隠してんな、この部隊。

「叩けば、埃が出る部隊だな。」

「それを言うな。俺だってそうだろ？しかも、最大級に性質の悪い。しかし、どうやってこの部隊設立したんだろうね。」

「なに？」

「メンバーを見てみると、高町なのは、フェイト・ハラウン、八神はやて。この時点で魔導師ランクがオーバーススを越えてる。他

にも、ヴォルケンリッターなどといったSランクの魔導師が出てくる。明らかに一部隊にしちゃ戦力を保有しすぎだろ。」

「確かに・・・」
と思案顔になる、レジアス。

「ま、その辺も裏があるんだろうね。・・・うし、まあ行きますか。」

「あ、鯉斬。お前に一つ知らせておく。」

「あん？」

「お前の地位、昇格しといた」

「は？」

「今からお前は神海 鯉斬『少将』な」

ポクポクポク・・・チーーーーーン・・・

「はあああああ!?!」

「うるさいぞ。」

「いや、ちよ、うるさくなるわ!!少将ってどういうことだ!!」

「まあ、なんとというか、書類の作成上なこっちの方が作りやすくてな。」

「オイオイ、マジかよ・・・」

「まあ、いいじゃないか。出世できたのだから・・・」

「所詮、俺にとっては肩書きだ、そんなもの。とはいえくれるなら貰っておくか・・・。では、神海 鯉斬少将、これより機動六課に出向します。」
「
といい敬礼した。」

「うむ。よろしく頼む。神海少将。通達は一応お前の上司のサラ一等空尉にしてあるから形式的になるが一応向かってくれ。」

「はいよ。じゃあ、往くなレジアス。・・・たまにはアイツ)・・・

（に挨拶ぐらいしてくれ。オーリスも）」

「・・・そうだな。今度の休みにでも行くか。」

「ええ、お父さん。」

「ありがとう」

と言いながら、ドアを閉めた。

「行ったな、あいつがあんな風笑うなんて見たことあるか？オーリス。」

「いや、ないですよ？お父さん。」

「アイツはこの『計画』が終わった時、救われるのだろうか・・・と二人しかいない執務室だが響いた。」

「サラ、居るか？」

「あら、ようやく来たわね。」

「さつさとやってくれ。向かわなきゃならないんだよ。」

「はいはい。焦らないの。・・・はい、コレが正式の辞令よ。」

「確かに承った。」

「（それじゃ、手筈どおりに情報を逐一に貴方に流せばいいのね？）」

「（ああ、頼む。）」

「では、行きなさい。」

とほんの少しのやり取りをし、地上本部をでた。

間に合うか、分からねえな。

「ジョーカー」

《ああ、なんだ？》

「ブーツを頼む」

《はいよ》

「機動六課はどちらか、分かるか？」

《待て、今調べる。・・・南東の方角だな。走っていけば）・・・
・・・）20分で着くぞ。》

「軽い運動として、走りますか。」

《常人にとっては『軽い』では済まされんな・・・》

なんか言っているが無視する。一言多いんだよ、このデバイス。

その後、「風」を肌で感じ、風が吹いたのと同時に飛びあがり、空を翔けていった。

（鯉斬side out）

（はやてside）

待ち合わせの時間は13時であるが今現在時刻は13時半、30分も遅れていた。

「ふふふ、何やってんや！！鯉斬さんは」
と軽くこめかみに怒りマークが浮かびながら、部隊長室で一人怒鳴った。

そのあと、部隊長室の周りで黒いオーラのようなものが湧き出ているという噂が流れることとなった。

（はやてside out）

（鯉斬side）

空を翔け、機動六課の隊舎についたのは約束の時間の10分前には着いていたが、事もあるうことが迷っていた。

「（部隊長室ってどこだよ？いつそのこと、学校みたいに部屋の目印として看板下げてもらえねえかな。）」

と愚痴りながら、部屋を探す鯉斬。

《コウキ、約束の時間30分もオーバーしてるぞ。》

「あー、ヤベエな。誰でもいいから通つてくれないかな?」

《そうそう、人が通るわけないd・・・》

「どうしたんですか?」

「通つたぞ?」

《・・・・・・・・》

「???」

何をしてるのか分からない少年は首を傾げていた。

「少年。悪いんだが八神部隊長の部屋を教えてくれないか? 恥ずかしいことに迷つてな。」

「あ、はい。こつちです。」

「すまん。」

「いえ。新しく配属された方ですか?」

「いや、異動かな。」

「異動つて前はどこに居たのですか?」

「本局」

さらつと答える鯉斬。

それを聞いて、少年は驚く。

「ほ、本局!?!」

「そんなに驚くか?」

「いや、驚きますよ!! だって「おい、エリオ何してんの?」あ、スバルさん。」

とスバルと呼ばれた少女とオレンジ色でツインテールの少女に召喚土っぽい女の子の三人がこちらにやってきた。

「えーと、こちらの方は?」

「神海 鯉斬“少将”だ。今日からここ、機動六課に異動となった。

「「「「え？！」「」」」

しどろもどろになる四人。・・・そこまで慌てるものか？

「あ、あの私はスバル・ナカジマ二等陸士ですっ！！」

「私はティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「僕はエリオ・モンディアル三等陸士ですっ！！」

「私はキャロル・ルシエ三等陸士で、ですっ！」

と一気に畏まれた。別にそんなに畏まなくてもいいんだが・・・
というか、ティータの妹にゲンヤさんの娘さんにフェイトの計画で
生まれた子に竜召喚を司る『ル・ルシエ』一族の子か・・・。
これは、なかなかどうして面白いメンバーだな。

「取り敢えず、そんな畏まらなくていいから部隊長の部屋に連れて
つて欲しんだが・・・」

「あ、ハイ！すみません。」

移動中・・・

「ここでs・・・!？」

わー、スツゲエ黒いオーラが湧き出てるよ。

「御苦労さん。また会うと思うけどね。」

四人はお辞儀をし、ホールに向かった。

コンコン・・・

「失礼する。」

といい入っていった、かつての教え子に・・・

（鯉斬side out）

〔三人娘・鯉斬 side〕

「失礼する。」

という無愛想な声がした後、問題の人物は入って来た。

「ようこそ、機動六課へ。神海 鯉斬少将」

「神海 鯉斬少将、機動六課に出向しました。」

とまあ、当り前な挨拶から始まった。

「一応ココ軍だからな。やらんといかんのよ……。どうせ、潰すけど。」

「高町 なのは一等空尉です。」

「フエイト・T・ハラオウン執務官です。」

「八神 はやて二等陸士です。」

「「「よろしくお願ひします!!」「」」

「ああ。」

とお互いを軽く紹介し合った後、はやてが軽い挑発をしてきた。

「……さすが、地上本部の少将。時間にルーズですね?」

「10分前にはこの隊舎に着いてたぞ? 部屋に行くのに迷ったが・

・

「ところで、神海少将。」

「なんだ」

「単刀直入に聞きます。……貴方はスパイですか?」

まあ、普通は聞くよな。目の敵にしているところから人が来れば、疑うのが当たり前か……

「……」

さて、どう答えようかね。

「黙らないで答えてください。生憎私はこの隊の総部隊長です。自分の隊に堂々とスパイを置くことなんて、絶対に許しません。……」

たとえ少将でも！」

「は、はやてちゃんそれは言い過ぎじゃ……」

「……はやて言い過ぎだと思っよ？」

「なのはちゃんにフエイトちゃんは黙ってて」

「スパイじゃない。……今はな（ボソッ）」

と最後に疑心を持たせるような発言をしたが、聞こえないようにしたのでバレてない。

「そうですか。その言葉信じます。……だけど、裏切ったら覚悟しといてくださいね。」

と表情は変えずとも、睨みつけてきた。

おお、怖い怖い。気をつけるようにしよう。

“覚悟”か……

安心しろ、はやて。制裁を受ける時には、俺はもう死んでるよ。

「もう一つ訪ねたいことがあるんですがいいですか？」

「どうぞ」

「鯉斬さん、地上本部では色々悪い噂を耳にしたんですが、説明してくださいか？」

「ええ?! どういうこと、はやてちゃん!？」

「そんな噂あったの？」

「そりやもー、たくさんや! ! 曰く『神海 鯉斬と一緒に任務に就くと八割ほどの人数が死ぬ』曰く『神海 鯉斬は人殺した』曰く『違法組織とつながりがある』など色々と黒い噂があるんや! ! そこからついた二つ名が『狂飢ノ鮫』や『死を撒き散らすもの』と侮蔑や嘲笑を込めて付けられた名や。しかも、その名が付きはじめたのは七年前。……私たちが訓練校で鯉斬さんと冴姫さんに指導を受けてもらってから、三ヶ月後ぐらいから出てきてる。」

「これ、ホントですか? 鯉斬さん」

と事情を聞いたフェイトが聞いてきた。

ヒフティ・ヒフティ
五分五分だから、なまじ答えにくい。

が、『計画』を悟られるわけにもいかないのだから嘘をつく。

「そんな噂をお前は信じるのか？」

「そうですね。でも、その雰囲気は止してもらえませんか？」

「どういう意味だ、なのは？」

「指導していただいた時のような感じの方がいいんです。今の鯨斬さんはあの時の鯨斬さんとは180度違う感じがします。」

「無理だな。」

「・・・何故ですか？」

「あの時の『神海 鯨斬』はもういないんだよ。」

「何故、居ないんです？」

「・・・七年だぞ？七年もあれば、人は変わる。周りが変わるように俺も変わった。・・・ただ、それだけだ。」

「七年の間に何があったんですか？」

「何もない。ただ、理不尽な世界を目にしただけだ。」

「どつという意味ですか？」

「・・・ハア、終わりの無い質問は終わりだ。用が無ければ、俺は帰るぞ。」

だんだん、答えるのが面倒くさくなった俺は強引に流れを干切った。

「待つてください。このあと、新人四人が訓練を行うんです。見に行きませんか？」

「・・・わかった見に行くから、そんな目で見るな、フェイト」
そんなやり取りのあと、フェイトは僅かながら曇らせた表情からぱあつと明るくなった。

なのはから部隊長の部屋を出て、そのあと俺、フェイト、はやてと出たが、はやては何か思案顔になっていた。

「あそこまではぐらかすなんて、なにかあるんやろな。．．．．．
人の過去を勝手に調べるは気が進まないけど、私の部隊に不安要素
は出来る限り排除しておきたいし、ロツサに調べてもらおうか」
と考えをまとめながら、三人の華(?)と共に鯉斬は訓練場に向か
った。

〈三人娘・鯉斬 side out〉

機動六課・・・か（後書き）

なんでこう長くなるかな？

・・・文才が欲しいなあ。

訂正しました。スモーク様ご指摘ありがとうございます。

これ・・・新人の訓練のはずだよな？

（鯉斬 side）

訓練場に向かった俺たちは、ちょうど先程出会った。四人組が敵となるガジェットドローン？型を八機程、相手にしていた。

「シャーリー」

「あ、なのはさん。来てたんですか？」

「今来たところだよ。」

「そちらの方は？」

「新しく配属された神海 鯉斬“少将”や」

「・・・へ？」

「神海 鯉斬少将です。よろしくお願いします。」

「あ、その、シャリオ・フィニーノ通信士及びデバイスの制作・整備の主任です。」

慌てて、敬礼しようとするが止めた。

「ああ、いいよ。今、新人たちのデバイスやらなんやらの設定やってんだろ？そのまま、続けていいぞ。」

「あ、はい。」

と作業を続けるシャーリー。

「鯉斬さん、新人四人。訓練を見て、どう思いますか？」

とガジェットを今も破壊しようとしている四人を見ながらいった。

「それは戦技教導官としての質問か？なのは」

「はい。」

「・・・スバルは真っ直ぐすぎる、ティアナは限度つてものを知らない、エリオはスピードだけで他がなっちゃんない、キャラ口に関し

ては自分の持つ力に怯えてやがるな。」

「やっぱりそう見えますか・・・」

「ああ、特にティアナなんか先走り過ぎてやがるぞ？あのままだと変な方向に走って、自分を壊すな。」

「終わりましたね。」

ブザーがなり、新人たちは帰って来た。

なのはは『壊す』という言葉に僅かに反応していたが、一瞬で元に戻り新人たちに声をかけていた。

あいつまだ自分を偽ってんのか・・・。

偽ってても碌な事にならないのに・・・、俺が言うのもアレだが。

「はい、みんな集合！」

「・・・はい！」「」

「あれが私たちが主に戦う相手だよ。大変だけど頑張っていこうね。」

「・・・はい！」「」

「シャーリー、デバイスの方はどう？」

「バッチリですよ。ちゃんとデータ取れています。」

「それじゃ、今度は鯉斬さんの番だね。」

思考停止中・・・

「・・・はい？」

「いや、鯉斬さんもやるんだよ？」

「マテヤコラ、俺ここに来たのは見学するためだよな？なんで訓練に変わってんの？」

「でも、エリオたちも見たがっているし・・・ね？」

「はい！見たいです！！」

「是非！！」

俺の周り全員が「見たい」という眼差しで見ている。後ろしか逃げ道がないが後ろにははやてがいた。

「どこ、行くんです？ 鯉斬さん？」

「……………」

「……………やりますよ。やればいいんだろ！」

《諦める、コウキ。逃げ場はねえ。》

「うるせーよ！！」セットアップたく、ジョーカー起動！！」

《はいはい》

黒いジャケットと多少蒼が混じり、脚にはA・Tに変えた。サングラスは気分で出すが、今回は出さなかった。

《特殊武装は出すか？》

「いらねえ……………いや、『グラン・スラッシュリッパー』だけ頼む。」

《分かった。モード“ゲシュペンスト”》

とジョーカーがシステム起動したあと、腰に三本のプラズマ刀が収まった。

プラズマ刀の利点は取り出したのみ、刃が出るようになって使用者以外が持つとただの鉄の棒に戻ってしまうことだ。

俺のみ使える武装だ。他の武装もそうだ。

俺が認証すれば、そいつも使えるが……………。

背中には巨大な三枚刃が二つある。普段は折りたたんであるが、投げると開く仕組みになっている。ただし、これは魔力を使わない為、質量兵器である。

「では、準備はいいですか？ 鯉斬少将。」

「ああ。それと少将は付けなくていいぞ。」

「わかりました。では鯉斬さん。位置に着いてください。」

「・・・着いたぞ。」

「では・・・出します。」

さて、そんなじやまやりますか！

（鯉斬 side out）

（三人娘＋一人 side）

「うるせーよ！！」セットアップたく、ジョーカー起動！！」

鯉斬さんのジャケットや武装を見て、私はこの人もエリートかと思
が沈んだ。

「（私だけか、この部隊の中で凡人なのは・・・でも、私は負けな
い。ランスターの魔法は立派だということを実証してやる！！）」
そんなティアナをよそに三人娘は鯉気の武装に注目していた。

「へー、スバルと似ているなあ。」

「でも、少し違うみたいだよ？」

「うん、カカトになんかついてるね。」

と三人は冷静に観察する。

「鯉斬さん、カカトについてるのは何ですか？」

「あ、コレ？まあ、訓練を見てれば分かるさ。」

教えてくれないようだった。

「むう〜。」

顔を膨らませるフェイトの表情が次の瞬間驚きに変わる。

「・・・いや、『グラン・スラッシュリッパー』だけ頼む。」

《分かった。モード“ゲシュペンスト”》

「鯉斬さん！それは何ですか！？・・・それに、背中に背負ってる

のは質量兵器ですか？」

「鋭いな、フェイト。やはり同じプラズマ刀じゃ一瞬で分かるか。背中のヤツも当たりだ。」

「鯨斬さん、局員が質量兵器を持つことは禁じられているんやけど、なんで持つてんの？」

「俺は質量兵器を保有することを認められているんだよ。」

「そんなことありえへん!!!」

「俺は特別に認証されているがな。ま、規制もある。対人は禁止だ。機械などの無機質相手なら使ってもいいのさ。(本当はすでにこれで人を殺しているがな)」

「・・・確かめさせて貰いますよ?」

「いいぜ。勝手にしな。」

「じゃ・・・シャーリー準備は出来てる?」

「ええ、もう。では・・・出します。」

.....

「スタート!!」

となのはが合図を出したときにはすでに七機が壊されていた。

〈三人娘+一人side out〉

〈鯨斬side〉

「スタート!!」

と合図と同時にガジェットの後を取り、魔力で覆った腕でガジェットめがけて振り降ろし、『叩き』壊した。

ドゴオン!!!

さらに、そのまま降り降ろした腕を基点に体を回転させ、一機をA・Tで真っ二つにし、そのあと腕で貫かれているガジェットを他のガ

ジェットにぶつけて破壊し、後ろのスラッシュリッパを取り出し回転の勢いを利用してスラッシュリッパを投げる。投げられたスラッシュリッパはブーメランのように回り、建物を破壊しながら突き進みターゲットを破壊し、鯨斬の元に戻って来た。

「ふう。」

とまるで、準備運動のような溜息を吐いた。

「……………え？」

「……」

まるで信じられない光景を見たと言わんばかりの表情をするはやて達。

「シャ、シャリー。今鯨斬さんガジェット何機破壊した？」

「え、えつと十五機中七機を破壊しました。」

「……………」

「……」

再び黙るはやて達。

「あ、いけね。数聞いてなかった、シャリー敵機は何機だ？」

「……………」

「おい、聞いているか？」

「……………すか？」

「ん？聞こえないんだけど？」

「……………何なんですか！？あれは……………！！」「……………」

「うおっ！？一体なんだよ」

「なんだよじゃないよ。鯨斬さん！！何アレ！？どうやったの？！」

「どうって、拳で貫いて、脚の武装で斬って、投げつけて破壊したただけだぞ？」

「……………何当たり前のこと聞いてんの？」のノリで帰せんでや！！」

《はいよ。属性は？》

「（風だな。）」

《セットした。》

「（ターゲットの位置は？）」

《ターゲットは・・・北東の方角と東南の方向に四機ずつ分かれている。》

「分かれたか・・・さっきの攻撃であと二、三機巻き込んでおけばよかった。」

《まあ、準備運動にもならないけど、最初としてはいい方だったじゃねーか。》

「まあ、いいか。考えたらキリがない。・・・ジョーカー東南グループの距離分かるか？」

《ちよい待ち・・・大体900mってところだが、何をするつもりだ？》

「分かってんだろ？俺が距離を空けた時の戦闘法を」

《これが人なら吃驚するほどの戦闘法だな。まずお前しかやらないよ》

「・・・ハッ！じゃ、行くぜえ！！・・・フンッ！」

と鯉斬は地面に足を思いつきり降り降ろした。

ドガァン！

ベキベキバキ！

降り降ろされた脚の力によって鯉気の周りには抉れた岩石が数個浮いた。

しかも、大きさは軽自動車並みの大きさが浮いていた。

そのあと、鯉気は風の膜を作り、浮いた岩石を捉えターゲットの元目掛けて、『蹴り』飛ばした。

Trick

Pile

トルネード
tornado!!

in

Store

ne bullet!!

放たれた技^{トリック}によってターゲットまでの道が確保され、そのあと数個の岩石は時速100kmを超えるスピードで飛んでいった。

途中、建物の壁に当たっていたが、バターが溶けるように瓦解していき、ターゲットに直撃した。

「よし、残り四機だな。」

《あゝあ、あいつら目が点になってんぞ。何かしら言われるぞ、これを見たら。》

「あいつらには向けないさ。……99%の確率で。」

《1%はあるんだ。》

「その時の気まぐれで、さてもう一グループの方もパイルトルネードでルートを確保するか。その後は……成るようになるだろ。さて、もういつちよ、オラア!!」

Trick Pile tornado Limited
express!!

先ほどとは違う形のパイルトルネードを創りだした。

中に“レール”を引きその中を走っていった。

空を翔けてもいいのだが、走った方がエネルギーが溜まるからだ。

「……いくぜ!!」

ジャカッ!

「穿て、牙!!」

ズドバアアン!!

ゴオオオオオ……

バアンツ!!

放たれた牙によって二体のガジェットは粉々になった。

「ジョーカー!!!」

《OK!!! Fire!!!》

『テンペスト!』

ドオン!

カカトのショットガンから魔力で造った槍が風の力を纏い、発射されAMFをいとも簡単に貫き、最後のターゲット二つを破壊した。

《ターゲット全破壊、訓練終了。》

「あゝ、説明するのメンドクセ。逃げちゃダメかな？」

《ダメだろ。》

「デスヨネー。さて・・・言い訳の貯蔵は充分か？」

《お前は、何を言ってるんだ?》

ホント何言ってるんだろうね。

〈鯉斬side out〉

〈三人娘side〉

開始直後に出したガジェットが目にも止まらぬ速さで七機も破壊されていた。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・え?」「」

この光景には私たち三人でも信じられなかった。

「えと、なのはちゃん。今の見えた？」

「私はあの大きな武器を投げたところしか・・・」

「私は脚で真つ二つにしたところからようやく・・・」

なのはとフェイトでも、一連の動きを完全に見切ることとは出来ない

らしい。

鯉斬さんが「ビデオ映像でも見てろ」というのでスローで見えることですよやくどんな行動したのか分かったが、それでも相当の無茶ぶりの戦闘法だった。

はやて……

え、ナニコレ？

こんなん誰も出来へんよ？

どうやったたら出来るん？

なのは……

わたしでもこんな動きは絶対に出来ないよ。

やっぱり、何かしら魔力で強化してるのかな？

終わったら聞いてみよう。

フェイト……

私よりも早い……。

速さには自信があったのに……、こんなの見せられたらちょっと落ち込むかも。

というよりも、一度やり合ってみたい。終わったらお願いしてみよう。

三人ともそれぞれの想いを抱きながら、映像を見ていた。

このビデオを見た後、はやてはシャーリーに残ったガジェットを半分に分け、別々の位置に置くように指示をした。

「さあ、今度はどうやって対応するん？」

といたずらっ子のような表情だったがその表情が一瞬で変わることを誰も予想していなかった。

「……」
本日の二度目の沈黙。

なんせ、地面が抉れ、浮いた岩石（大）が時速100kmオーバーでガジェットを鉄屑に変えているなんて誰が見ても、驚くというより夢を見るような光景だ。

新人四人なんか、やっとの思いで破壊した相手をあんな風に破壊されちゃ、落ち込むだろう。

もうすでに四人ともorz状態だった。

そのあとの光景も見たんやけど、もう何も言わへん……。悪い夢と思いたい。

……そんなキミたちにいい言葉を教えよう。

……エライ人はこう言いました。

……「常識は投げ捨てるもの！」

「……うるさい!!!」

アカン、なんか変な電波をかんじてしもうた。

ちよつと、疲れてるんやるか……。

訓練を終えた鯉斬さんが帰って来た。説明してもらわんと!!

三人娘 side out

これ・・・新人の訓練のはずだよな？（後書き）

無茶苦茶な戦闘法・・・。

体が静雄ベースだから出来る戦闘法ですね。

常人はまず無理です。

技の説明でも。

テンペスト・・・風の力を纏った魔力砲。形状は槍になっている。

AMFの効果は受けるが、速度が速いため無効化される前に相手を貫く。

チートだなこれは。

説明会（前書き）

時間が掛かってしまってすみません。

これから、真恋姫の小説の製作に入ります。
ちゃんとした作品になるかな。

説明会

（鯉斬 side）

いやー、体を動かした後は気持ちいいね！

………。

スマン、ちよつと現実逃避していた。

これさえなければなあ……。

目の前には今の訓練でした動きなどを詳しく知りたいという目、一戦交えたいという目、尊敬する目と色々な視線が思いつきり突き刺さっている。

……痛え。超痛え。

特に、はやてとフェイト、ティアナなんか凄まじい眼力だ。人殺せそうだな。

「………なんか質問は？」

重い空気に耐えられなくなって、質問を許した。

「今の何ですか!？」

「かっこいいです!!」

「どうやったんですか!？」

「どんな魔法なの?!」

「詳しく教えてや!!」

「鯉斬、一戦交えて欲しい。」

一片に來た。まあ、分かってたけどさ……。

「魔法は極力使っていないぞ？」

「……え?」「……」

「だから、魔法はあんま使っていないって言ったんだよ。」

「……ええ……!?!?!?!?!」

そんなに驚くもんかね？

「だって、竜巻とか出してじゃん!!」

「ありや、自然の力で出したんだ。」

「じゃあ、そのあとガジェットを壊したのは？」

「あれは制動エネルギーだ。」

「制動エネルギー？」

と首を傾げる者たち。

「あー、あれだ。簡単に言つとそうだな。自転車あるだろ？アレつてペダルを漕ぐことで前に進む。そこまでは分かるな？」

頷く八人。

「その漕いで出来るエネルギーを一か所に集めて放出する機能が俺の武装には付いているんだよ。OK？」

八人は「なるほどなー」と頷いていた。

はやてはすかさず次の疑問を聞いてきた。

「じゃあ、あの竜巻や岩石の弾丸は？」

「アレも、この武装でやった。地面を抉ったことは説明しなくていいな。やったあとの方が重要だ。アレは岩石の塊を風の膜で包み込んでだよ。」

「風の膜？」

「実際にやった方がいいな。ちょっと離れて……ズンッ！」
誰か寄つてみてみ？」

と少し離れたあと、俺を中心に風の膜のドームを創り誰か来るように指示した。

どうやら、スバルが来ることとなった。

「行きますよ、鯉斬さん。」

「少し助走してからの方がいいな。」

「え……。大丈夫なんですか？」

「安心しろ、突っ込んだところで動きづらいと思うから。」

スバルは勢いよく突っ込んだが、膜に触れた瞬間、まるで見えない壁に阻まれたように動きが止まる。

「どう？スバル。」

「くっ！！痛いです。」

「あとはこの膜を利用して、空気を回転させ風の“面”を叩きつけるように足でやれば技の完成だ。」

「じゃあ、魔法を使ったのは？」

「ガジェットを拳で貫いた時と脚で真つ二つにした時、そして最後のカジエツト達を破壊した魔力弾ぐらいだな。あ、あと魔力刃を創った時のみな。」

「それしか使っていないんですか……」

「基本的に俺は魔法は身体強化と魔力弾ぐらいかな。メインは自然の力だから。言っちゃえば、自然の力がある限り俺の戦場はどこにでもあるって言えばいいかな。ガジェットみたいなアンチ系を使う敵にとつては、俺という存在は天敵なのさ。」

〈鯨斬side out〉

〈三人娘・鯨斬side〉

「鯨斬、一戦交えたいんだけど……」

とさつきから戦いたいと主張するフェイト。

コイツ……。もう完全なバトルマニアになってねえ？

シグナムが原因だな。

「また今度だ。一応同じ部隊だ、明日でも出来るだろ。」

「むう~~~~」

「そんなにむくれるなよ。」

と表情は変えずともむくれるフェイトにしようがなく頭を撫でた。

「え、ひゃっ!?!」

「今日はこれで我慢してくれ。」

「……はい/ /」

「……はい!」

フェイトを余所になのはとはやては「ジッ」とこちらを見ていた。

「(……ずるいなあ、フェイトちゃん。憧れの先輩を独り占めして……)」

「(……あのフェイトちゃんを手なずけた!?!くっ、侮れん人や!?!)」

二人は全く違うことを考えていたようだ。

……無言が怖いんで喋ってもらえませんか?

「メシ食いに行くかー、腹減ったし。」

「あ、いいですね!」

「僕もおなか減りました。」

「私も」

「ということで、訓練を終わりにしたいんだが、……その三人娘聞いている?」

「……」「……」「……」

「思考の中に居るみたいなんで、俺が仕切るか。んじゃ、訓練終了だ。」

「……はい!有難うございました!」

「おう。シャワー浴びてから食堂に集合すつか。」

「……はい!」

「シャーリーも御苦労さん。」

「あ、はい。なのはさん達どうしましょ?」

「ほつとけ、そのうち返ってくるだろ。」

「でも、このままは・・・」

「ハア、何時まで経っても手間のかかる後輩だな。・・・レイジングハート、バルディッシュ。」

《《なんですか？鯉斬さん》》

「返ってきたら、食堂にいるって伝えておいてくれ。」

《《わかりました。》》

「一応呼びかけろ、それでも起きなかつたらこう言え。確実に起きる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・だ。」

《《やってみます。》》

「頼むぞ」

といい、エリオに案内してもらって行った鯉斬。

これを聞いてたシャーリーは「このあとが怖い」と思いながら、整備室に帰っていった。

なのは達を除く六人が隊舎に帰った後、例の如くなのは達は思考の中に居たため、レイジングハート達が一度呼びかけたが、反応がなかったため鯉気に教えてもらった言葉をかけた瞬間、一瞬で三人は戻って来た。

三人は「誰に教えてもらったの!？」と鬼気迫る様子で聞いてきたので答えたところ、一直線に目的地に目掛けて走っていった。

レイジングハート達は要件を伝えたあと、《《大変なことになりそうだ》》と呟いていた。

〔三人娘・鯉斬side out〕

〔鯉斬・フォワード陣+バカ三人side〕

「・・・スバル、エリオ。お前らそんなに喰うのか？」

「いつもコレぐらいが普通ですよ？」

「自然と入っちゃんですよね。」

三人娘を除くメンバーは食堂に集まり、各々食べたいものを頼んでいたのだが、はつきり言つて、ちよつと想像を超えていた。・・・特にスバルとエリオ。

軽く三人前はある、ナポリタンを普通に二人で完食していた。

ありえねえだろ・・・、どつという胃袋してんだ？

と食事が進み、ある程度経つてから、バカ三人がこっちに迫つて来た。

あの様子だと、一度では起きなかつたな。

「・・・鯉斬さん!!!」

「耳元で騒ぐな。騒々しい。それと食事中だ、静かにしろ。」

「・・・あ、はい、すみません。・・・じゃなくて!!!」

「なんだよ・・・」

「・・・なんですか!!!あの起こし方は!?!」

「あれが一番手っ取り早いんだよ。呼ばれたくなかつたら一回で起きろや。」

「・・・うっ!!!」

至極真つ当な反論されて言い返せない三人。

「ちなみになんて言う伝言を残したんですか？」

と命知らずな発言をするスバル。

・・・勇気あるなお前。

「聞いてもいいけど、後のこと・・・おが!?!」

「なんでもないよ、スバル」
「そうそう、なんでもないからね？」
「そうや、なんでもないで。」
と三人がかりで鯉斬の口を押さえる。

「（ちよつと！スバル。止めておきなさいよ！）」

「（えー？）」

「（「えー？」じゃない！見なさい隊長達を表情で隠れているけど、修羅のようなものが見えるわ。）」

「（・・・うわ、ホントだ。止めておこうか、ティア。）」

「（そうしなさい。）」

「やっぱやめます。」

「そ、そう。よかった。」

「ほんまや〜。」

「ホントだねー」

と笑っているがどこか笑っていないのは達。

口の拘束を解けた鯉気が言った。

「どうせ、バレるんだからこのさいバラしちまえよ。」

「にははは〜、鯉斬さんはちよつと黙っておこうか？」

「そうだよ？鯉斬。ちよつと黙ろうか？」

「そうやで、鯉斬さん。こんなことで命散りたくないやろ〜？」

・・・おお。凄い威圧感だ。常人なら発狂しかねないな。

いや、むしろ喜ぶかもしれないな。美少女三人がこんなに迫ってきたら。

・・・現在の状況がなかったらだけど。

「そんなんだから、“白い魔王”と呼ばれるんだよ。なのは」
サラっと言ってしまった鯉斬。続けて爆弾投下発言。

「フェイトも“夜叉”って言われたくないだろーが。はやては黒い発言ばつかしてるから“豆狸”って呼ばれるんだよ。」
この発言に三人とも固まる。

「「「こ う き さくくん???’」」
マジで目が怖いです。」

「今日は寝ずに“お話”しようか?」

「そうだね、“オハナシ”しよう、鯉斬」

「そうやな、そうしようか。鯉斬さん?」

「・・・俺、夜用事が・・・」却下「」

「デスヨネー」

魔王からは逃げられないか・・・!!

しょうがない、この手を使うか。

「夜までつてことはなのは達は俺の“夜の”相手をしてくれるってことかい?」

突然の発言にその場の人間が一度止まる。

「えっ!?!」

「ふえ?!」

「・・・////」

「「「え?」」」

「どうなんだ?」

「「「・・・////」」」

どうやら三人とも答えられないようだ。

おおかた、“夜の”想像をしてんだろー。・・・違う捉え方もあるのに。

・・・エロくはないぞ?

まだ“夜の”しか言っていないし、その後に言葉が続くかもしれない

のにな。

「さて、返答は？」

「いや、もういいです。」

「・・・ウチも」

「・・・私も」

「そうか。ちなみに何を想像してたんだ？」

意地悪く追撃をしかける、俺。

「え、えつと・・・なのはちゃん頼むで！」

「ふえ！？じゃ、私もパス！フェイトちゃん頼んだ。」

「ズ、ズルイよ、二人とも！！！」

「で、何を想像してんですか？」

完全に追い詰められたフェイトは恥ずかしそうにちいさな声で答える。

「（・・・。。。。。。）」

全く聞こえなかった。

「なに？聞こえないよ？」

「（・・・。。。。。。。。）」

すでにフェイトの顔は真っ赤だ。

フェイトにとって最大の声だったのだろうが、聞こえない。

なので皆さん。はい御一緒に・・・。

「なあ〜に〜、聞こえんな〜？」

・・・もうやめて！フェイトのライフは0よ！！

だが断る！！というのは冗談でえ、これぐらいにしておこう。フェイトが倒れかねない。

「冗談だ、フエイト。悪かったな悪戯して。」

「・・・うう、グスツ。」

「もー、泣くな。なんか次の休み奢ってやるから。」

「・・・うん。」

「というか、想像しすぎなんだよ、フエイトにはやて、なのは。俺はまだ“夜の”しか言っていないぞ。その後にもまだ言葉が続くかもしれないだろ？食事とか訓練とかさあ。」

「・・・あ・・・」

この発言で全員がソツチの発想に至っていたことがわかった。分かりやすく、何よりです。

「んじやま、俺は先に上がらせてもらっぞ。荷ほどきしなきゃならないしな。」

と言って食堂を出た。

そのあと食堂に居たメンバーはこう思った。

「・・・絶対鯉斬（少将）（さん）に口喧嘩を仕掛けるのは止めよう」「・・・」

となんせ、あの“エース・オブ・エース”のなのはが口で負けた光景をこの目で見てしまったからだ。

その後、機動六課では暗黙のルールの一つとして加えられた。

一方、鯉斬はあのやり取りを見てたヴァイスに以後旦那と呼ばれるようになったらしい。

（鯉斬・フォワード陣＋バカ三人 side out）

説明会（後書き）

最後がエロくなっただが、たまにはいいよね！

教導開始・・・そして、晝く影

（鯉斬side）

今、新人の訓練が始まったようだ。

現在俺は、ちよつと部屋を改造中だ。

電話などを盗聴されない為に、特別なものに変えている。

・・・ガリガリ。

完成した。これで脳髓共にバレないだろう。

さて、俺もそろそろ訓練に参加しますかね。

（鯉斬side out）

（なのはside）

「はい。じゃ、三セット目いくよ。準備はいい？」

「。。。はい！」「」「」

「訓練スタート！！」

と同時にガジェットが八機出現した。

前回は倒すのに一苦労したが、教導のおかげかそんなにも苦にはならなくなっていた。

それでもつらそうだが。

そこに少し遅れて鯉斬さんが来た。

「おう。おはよう、なのは。」

「お早うございます。鯉斬さん。遅刻ですよ？」

「ちよつと、荷ほどきに時間を食ってな、寝るのが遅かったんだよ。で、アイツらはどんな感じだ？」

「いい感じですよ。育てがいのある四人です。」

「さいですか」

「あ・・・終わりますね。」

なのはがスバル達を見て言った。

スバルの最後の一撃がガジエットのAMFを貫いて、ブザーがなる。

「この戦闘で10分を切らないか・・・ちよつと、辛いな。」

「でも、初めての方では良いタイムだと思っけど・・・。」

「せめて、7分は切つて貰わなきゃダメだな。」

「キツすぎませんか？」

「たかが、ガジエットに10分も掛かつてられたら、複数犯のグループに当たつたとき、レリックを持ってかれるぞ？」

「それを言われるとちよつとな。」取り敢えず、スバルたちが待つてますので行きましょう。」

そんなことを言いながら、俺たちはスバルたちの元に向かった。

「なのはside out」

一方こちらは・・・

「フェイト・はやてside」

私たちは今、地上本部でロストロギア“レリック”の危険性について会議をしていた。

「さて、今回集まってもらつたのはこれをお話するためです。」

と言うとモニターに赤い水晶が映つた。

「ロストロギア、通称レリック。なんらかの目的で造られた超古代文明技術です。」

「しかも、このレリック見た目は小さいですが、扱いを間違えると凄まじい災害を引き起こします。そのうちの一回は数年前に起こつた“ミッドチルダ第四ポート火災事件”でも、原因はこのレリックと判明しています。」

そこまでいうと、会議のメンバーは騒ぎ始めた。

「しかも、このレリックを何個か回収しようとする未開踏の星に行ったところ、その行く先々に研究所らしきものがありました。いずれも、痕跡は残されていませんが、誰かが意図的に研究していることは明らかです。」

「そこで、このレリックなどの対ロストロギア専門の対策室が私たち“機動六課”です。」

と機動六課の存在を話し、しばらくたってから会議を終わりにしようと思ったとき、ある一人の局員が意味深の言葉をかけてきた。

「八神二等陸佐。」

「はい。なんでしょう？えと・・・」

「ああ、スイマセン。私はクライブ・リユート一等陸士です。」

「これは失礼しました。クライブ一等陸士。で、ご用件は？」

「機動六課に神海少将っていますか？」

「はい。いますか？」

「そうですね・・・。これを伝えるのは極秘の為、あまり彼に気取られないようにしてください。」

「なんですって？」

「彼は私たち管理局に対して何かを隠しています。それにウチの調べではスパイの疑惑が掛かっています。充分気を付けてください。・・・では失礼します。」

と言ってクライブは去っていった。

「・・・はやて、今の話し信じる？」

「信じたくない。だけど、地上本部の情報はたまに核心をついた情報が続いてくるから、無視するわけにもいかんなあ。・・・フェイトちゃん。さっきの話、誰にも話さんでおいでくれるか？私の方でちょっと探ってみる。」

「・・・分かった。誰にも話さないよ。じゃあ、帰ろうかはやて。」
「そやな、帰って昼食にしようか。」
私たちは意味深な話しを聞き、地上本部を後にした。
くフェイト・はやて side outく

教導開始・・・そして、**蠢く影**（後書き）

今回短っ！

どうしてこうなった？

覚醒セシ者（前書き）

なのはも出来たので投稿だ！

覚醒セシ者

（鯉斬side）

【……………主よ。】

「誰だ？俺を呼ぶのは？」

【俺は、……………だ。】

「聞こえないぞ？」

【随分前から俺は呼びかけている。】

「姿を見せる！！」

【再び、主の前に現れる。その時に再び会おう……………】

「オイ！どういうことだ！？」

【……………】

そこで俺は目が覚めた。

なんだったんだ、今のは？

そこになのはが覗き込んできた。

「大丈夫ですか？鯉斬さん。」

「あ、ああ。別になんでもない。」

「そういう風には見えないですが……………」

「ちょっと、寝不足なだけだ……………」

「そうですね・・・」

「で、新人たちの訓練はどんな感じだ？」

「皆、よくやってくれてますよ・・・ボロボロですが。」

「ま、最初はそんなモンだな。慣れてもらわないとこの先に進めねえからな。」

「そうですね。キツイけど皆には頑張ってもらいたいですね・・・はい、訓練終了！」

「なのはスバルたちの元に行った。鯉斬が咳いていたとも知れず・・・。」

「そう、頑張ってもらわないと困るんだよ・・・俺の計画にも、な。」

「そう呟き、鯉斬もスバルたちの元に向かった。」

「行ってみるとなんか焦げくさかった。」

「スバル、お前のデバイス煙上がってんぞ？」

「へっ？あぁー！！！」

「原因は無理に扱っていたため、負荷に耐えれなくなっていた。」

「ティアナのアンカーガンも結構ガタが来てるだろ？」

「え、あ、はい。分かってたんですか？」

「スバルを援護するとき、一度スカッただろ？」

「うっ！」

「なのは、そろそろ新デバイスを与えても良いんじゃないか？」

「ちょうど、そう思っていました。」

「・・・新デバイス？」

「そう、新デバイス。そのままの状態でも任務に就かれても、命を落としかねないからな。「それなら」」

「それなら、一気にデバイスを新しくして、気を引き締めると同時

にお祝いも兼ねてね。取り敢えず、シャーリーのところに向かおうか。」

「……はい!」

（鯉斬 side out）

（なのは side）

鯉斬さんの表情が突然すぐれなくなっていたのを見て、私は心配したが本人が「大丈夫だ」と言っていたのでそれ以上は言わなかった。訓練を終了させ、皆を集めた時にスバルの足から焦げ臭いにおいが出た。

よく見てみると、オーバーヒートしていた。

「（そろそろ、新デバイスの出番かな?）」

「なのは、そろそろ新デバイスを与えても良いんじゃないか?」

「そうですね、ちょうど思っていました。」

鯉斬さんはエスパーかな?

私が思っていたことを先に言うなんて……。

私たちは取り敢えず、シャーリーのところに向かうべく移動した。隊舎に着いた時、向こうからフェイトちゃんの手車がやって来た。

「なのは。」

「わぁー!これフェイト隊長の手車ですか?」

「うん、そうだよ。ゴメンネ、エリオにキヤロ。本来なら私が訓練

を見る筈なのに……」

「いえ、大丈夫ですよ。」

「はい、大丈夫です。」

「そう、ならよかった。」

「フェイトちゃんたちはこれから外回り?」

「私は、聖王教会に用事があるから、送ってもらおうよ。」

「そのあと私は、6番ポートに用があるから送ってから向かうの。」
「そうなんだ。」

はやてちゃんが「意外と部隊長つて大変なんよー」と言っていた。

「あ、鯉斬さんもちよつと私と一緒に着いて来てくれませんか？」

「俺がはやてと共に？」

「ええ、カリム・グラシア少将がお話したいそうです。」

「・・・分かった。なのは後は頼むぞ？」

「はい。」

「ジョーカー、足のみ起動しろ。」

《ああ、了解。部分展開だな。》

「そうだ。」

《・・・展開完了》

「なんで展開してるんですか？」

「フェイトの車は二人乗りだろ？だから、俺はその車の後を追いかける。」

「そんなこと出来るんですか!？」

「出来るぞ?」

《実際、コイツ六課の隊舎に来るときに本部からここまで翔けてきたしな》

軽い準備運動程度だったんだけどな。

「ウソっ!?!」「」「」

《本当だ》

「というわけで、フェイト達は車の上に目印みたいなもの付けてくれよ。それを目印に追いかけるから。」

「え、あ、はい。」

「じゃあ、先に行け。追いかけるから。」
と言った鯉斬さん。

フェイトちゃんたちは先に行き、しばらくしてから鯉斬さんは動いた。

「そろそろ、良い距離かな？」

「へっ？」

「んじゃ、行ってくるわ。」

と言った瞬間、一気にジャンプし「いい風だ」と言ってフェイトちゃん達を追いかけていった。

あり得ない光景を目の辺りにした私たちは半ば呆けていたが、気を取り直してシャーリーのところに向かった。

「じゃ、じゃあ、みんな行こうか？」

「……」

「なのはside out」

「フェイトside」

鯉斬から「先に行け」と言われ、上に目印を付けて向かっているが、ミラーを見ても鯉斬の姿は無かった。

「鯉斬、追い付いてないね。」

「追い付いてないなあ。」

「……スピード、落とす？」

「落としたほうg……!？」

「どうしたの、はやt……!？」

バックミラーを覗くと鯉斬が空を翔けていた。こちらに気が付いたのか、手まで振っていた。

「もう、何も驚かへんよ。」

「何も言えないよ・・・鯉斬」

そんなことを呟きながら運転し、一行は聖王教会に着いた。

「フェイトside out」

「鯉斬side」

うい、無事にフェイトたちを追いかけて、聖王教会に着いた俺たちはやてからは「ありえへん」とorzになっていた。

俺の行動ってそんなにおかしいのか？

《おかしいに決まってるだろ。》

うるさい。心を読むな、ジョーカー。

フェイトははやてを送ったので6番ポートに向かった。

「はやて、ほら行こうぜ。カリム・グラシア少将のところに。」

「あ、はい。そうですねー(棒)」

「なんで、そんな不機嫌なんだよ。」

「気にしないでください。」

よく分からねえ奴だな？

「鯉斬side out」

「カリムside」

今日のはやてとゲストの方が来る予定だった。

時計を見ても、そろそろ来るはずだった。

そしたら、シャツハから伝言で「はやてが来た」と通信が入り到着したと報告が来た。

「失礼します」

「久しぶりね、はやて。」

「カリム、久しぶりやな。」

「そして・・・ようこそ、聖王教会へ。神海 鯉斬少将。」

「神海 鯉斬少将です。・・・カリム・グラシア少将。」

「堅くならなくても結構ですよ。」

「挨拶ぐらいは真面目にやった方がいいだろう?」

「それもそうですね。立ち話もなんなのでこちらにどうぞ。」

一服中・・・

「で、今回はちょっと頼みごとをお願いしたいのよ。」
と言って、カーテンを閉めた。

映し出しているのは、ガジェットの新製と不審貨物。

「ここ最近、新型のガジェットが二つほど出現したのよ。特に三型は人よりも若干大きい型です。それと同時にミッドチルダに不審貨物・・・多分レリックだと思っただけど。」

「ちよつと早いような気がするなあ。レリックがガジェットに見つかるとの時間は?」

「予想では今日、明日かしら。だからこそ、相談したかったのよ。」

・・・対処をしくじるわけにはいかないし。」

言ったがはやてはカーテンを開けた。

「大丈夫や。カリムのおかげで、部隊の隊長達にフォワード陣は動かせる。」

さらには不測の事態にも対応できる下地が出来てるから心配はいらへん。」

「そうですね。」

「で、俺がここに呼ばれた事の説明は?」

今まで黙っていた、神海少将が口を開いた。

「そうですね。・・・そろそろ本題に入ろつかしら。」

「そやね。」

「神海少将、貴方にスパイの疑惑が掛かっています。」

「へえ・・・。」

「あまり動じませんか？」

「動じて隙を見せる奴は、バカだろ？」

「そうですか。」

「で、情報源は誰だ？」

「言えません。」

「そうかい。・・・見当はついてるがな。」

「なっ!？」

「知っているんですか？」

「多分、クライブ辺りが言ってきただろ、はやて?。」

「なぜ・・・分かったんですか？」

「アイツは昔から、他人の不正行為を探し出してそれを晒すこと
上に昇っていった人間だからだ。ときには嘘の証拠も本物だと思わ
せてやっているしな。」

「それ、ほんまですか？」

「ああ、本当だ。」

「大方、俺の異例な出世が気にいらねえのが原因だろうよ。(本音
は奴の上司は確か、脳髄共の息のかかったやつだから、脳髄共が命
令して、それをその上司が奴に命令したと言う形だろうな。)
地上本部は伏魔殿バンテモニウムだつて言われてるけどその通りみたいね。」

「それが用件か？」

「ええ、そうですが、事の真意が分かったのでいいです。」

そのとき、アラート音が鳴り響いた。

「コイツは第一級警戒態勢か、レリックが見つかったかな？」

「はやて!。」

そこから、私たちは話し合いを止めて、それぞれの戦場に向かった。

カリス side out

覚醒セシ者（後書き）

よくよく考えてみたら、車を追いかける程の体力があるんだろうか……

最初の冒頭の流れは、なんなのか。想像してみてください。

そして、これから新人たちの魅せ場だ。

『ファーストアラート』にどんだけ時間食ってるんだ？

最後にこれからちよくちよくと脳髓共のちよっかいが出てきます。

ファーストアラート 前編(前書き)

一つに纏めきれんかった・・・。

ファーストアラート 前編

（鯨斬side）

やかましく鳴り響く警報、そのあと機動六課と帰る途中のフェイトにつながった。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、大丈夫か?!」

「大丈夫!」

「対象はリニアで移動中・・・」

「移動中ってまさか・・・!!」

「そう、ガジェット達に占拠されて、制御システムが完全に狂わされている。」

「私はこれから、急いで戻るけど二人にスバル、ティアナ、エリオ、キヤロ行けるか?」

「・・・はい!!」

「鯨斬さんはどうします?」

『俺は直接向かう。空の掃除だ。・・・ジョーカー!!』

「分かりました。では、機動六課フォワード陣出勤!!」

そこで、通信を締めはやては出る準備をした。

俺か?ちゃんと着替えたよ、戦闘服に。

《準備出来たぞ?》

「よし・・・先に行ってるぞ。」

「はい。なのはちゃんたちも後ほど追いつくと思うんで・・・。それまで保ってください。」

「安心しろ。着いた時にはほとんど殲滅しているだろうよ。」

「へっ?」

と言って、裏口から出た俺たち。

俺は何回か、準備運動をした後、空を翔けた。

（鯉斬side out）

（はやくside）

鯉斬さんが空を翔けた後、私は思ったことを口にした。

「いつ見ても、おかしいと思うんやけど、カリムはどう思うっ？」

「え？ええ、私もそう思うわ。それよりはやく戻りなさい。シャツハお願いね。」

「分かりました、騎士カリム。」

「また会おうな。カリム。」

「ええ。またね。はやく。」

新人四人を入れた、初出勤や。気合を入れなかアカンな。

（はやくside out）

（なのはside）

今私たちは、ヴァイスくんが運転する『ストームライダー』で移動中だった。

みんな初めての出勤であって、緊張しているのか黙っただけだった。

「みんな大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫です！」

「私も」

「僕も」

「……………」

キヤロだけは返事をせず、俯いていた。

「キヤロ……。怖いのは分かってるよ。だけど、失敗しても構わないから精一杯頑張ろう？」

「……………はい！」

「さて、なのはさん！目的地に!？」
ヴァイスくんの声が途中で止まった。

「どうしたの？ヴァイスくん？」

「なのはさん、アレ!!!」

ヴァイスくんが指差す方向には、想像を絶する光景があった。

「なのはside out」

「フェイトside」

「グリフィスくん、私に飛行許可を。」

『はい。飛行許可認証します。』

「ありがとうございます」

『もう、すでに神海少将が現場で交戦中です。』

「分かった。・・・バルディッシュ!!!」

《セットアップ!!!》

BJに着替えたフェイトはそのまま一気に上空まで昇り、鯨斬の元まで向かった。

「フェイト・ハラオウン、行きます!!!」

「フェイトside out」

「鯨斬side」

さて、今現在俺はリニアの近くの空に居る。
さすがに、同じ動作を動かすのは疲れるので、飛行魔法を使っている。

「(さて、おい！出番だぞ!!!・・・「zzz」起きろ、メガロ!!!)」

『ん？ああ、なんだ鯨斬?』

「（仕事だ。全部喰らえ。）」

『あの鉄の塊どもをか？』

「（そうだ。）」

『メンドクセえな』

「（やかましい。働け！！）」

『はいはい。』

「（いくぜ！！・・・全てを喰らい尽くせ！！海竜神！！）」
リウアイアサン
と言葉を発した後、飛行ガジェットの真下から大きな影が現れ、次の瞬間身を翻すようにメガロはガジェット達を喰らった。

ザバァン！！

ガシャ、ベキベキ！！

体に付いてあるヒレや尾びれで喰い残したガジェット達を両断していく、数百機あつた飛行ガジェット達はたった一回の喰いで、約9割が破壊されていき制空権を制圧した。

そのときに、なのは達を乗せた『ストームライダー』が降下ポイントまで来た。

（鯉斬 side out）

（なのは side）

私たちが見た光景は、想像を絶するものだった。

私たちが機動六課を出てから、5分少々の間で空を埋め尽くしていた飛行ガジェットはほぼ消え、制空権を確保していた。

それよりも驚いたのが、あの巨大な鮫だ。

「あんなのどこから出てきたの！？」

その時、鯉斬さんから通信が来た。

『・・・ヴァイス』

「旦那！！アレは何ですか！？」

『それよりも新人たちを下せ。やるべきことをやらせる』

「うす。．．．それじゃあ、なのはさんにガキども行けるな！？」

「『』はい！」「『』はい！」「『』はい！」「『』はい！」

「じゃあ、私から行くね。．．．皆、頑張っていこう！！」

「『』はい！」「『』はい！」

そして、私は『ストームライダー』から降りながら、Bに着替えた。

「レイジングハート、セリット・アップ起動！！」

そのあと、スバルたちは次々と降りていき、無事リニアに着地した。私も、鯉斬さんの元に向かわなきゃ！

「なのは！」

「フェイトちゃん！」

「一緒に鯉斬さんの元に行こう。」

「うん。」

あの鯨について、聞かなきゃ！！

くなのは side outく

くフェイト sideく

私はなのは達よりも若干早く、交戦ポイントの空域に着いていた。遠くに鯉斬の姿を視認出来た。

その時、急な次元転移反応が現れ警戒した。

反応場所は、あの飛行ガジェットの群れの真下からだった為、敵の増援と思いきいで鯉斬の元に向かおうとしたとき、その反応場所から出てきたのは、説明するのが難しくかつ理解できなかった。

なんせ、XL級戦艦ほどの大きさを持つ、巨大な鯨がガジェットの群れを喰い荒らした。

たったの一撃で、ほぼ全てを持っていき、さらに制空権を確保した鯨斬はあくびをしていた。

私は茫然とした。はやてのところに繋がったが、全員目を疑うような光景を見た為か応答がない。

向こう側から、桜色の魔力光が見えたので、なのはに駆け寄った。

「なのは！」

「フェイトちゃん！」

「一緒に鯨斬さんの元に行こう。」

「うん。」

あの鯨について、聞いたたださなきや。

〈フェイトside out〉

〈はやてside〉

「なんや・・・アレ」

「今見てる映像が嘘であってほしい。」と何度も頭の中で囁かれた。

「あれは神海少将の使い魔でしょうか？」

とグリフィスくんは冷静を装いつつ聞いてきた。

「あんなのが使い魔だったら、きちんと申してあるはずですよ！」
シャーリーは叫んだ。

「あり得ない・・・」

そう、この光景は「あり得ない」。たった一言でこの状況は説明できる状況だった。

「シャーリー、通信開いて。」

「へ？」

「通信や！鯉斬さんに直接問いたです！！」

「あ、はい！！」

『・・・なんだ』

「なんですか！！アレは！！！」

『色々省けば、俺の使い魔になるのかな？』

「その“色々”の部分がじっくりと聞きたいですね。」

『話して、どうする？・・・機動六課の後見人のクロノ提督とリンディ提督に話すか？』

「・・・何故、知っているんです？」

『お前、バカか？知ろうと思えば情報なんていくらでも手に入るんだぜ？』

ちよつと、カチン！と来た。

「ええ、話します。そんでもって意地でも話させてもらいます！」

『その会談、実に楽しみなな。』

「“楽しみ”ではなく“マズイ”の間違いじゃありませんか？」

『ハア、こんなこと言いたくないんだけどよ。・・・お前らだけが有利ってわけじゃないんだぜ？』

「・・・どういうことです？」

『・・・この部隊設立に俺達地上本部が気が付かないと思ったのか？』

「それはどういう意味です？」

『先程、クロノ提督とリンディ提督が後見人と言ったが、違うよなあ？あと三人ほど居るってこと俺は知ってたぞ？』

「・・・っ！？」

『さてと“コレ”がバレたら、地上本部はあきらかにこの部隊を見張るよな？「機動六課は何かを隠してる」などの想像が簡単に思いつくか。しかもこの部隊は管理局でも一位、二位を争う程の戦力とメンバーが居る。・・・ここまで言えば・・・分かるな？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
私は答えられない。

『黙っている。ということは肯定ということか。』
私は思いつきり、鯉斬さんを睨みつけた。

「貴方は何がしたいんですか!？」

『別になにも?』

「・・・・・・・・はい?」

『俺の事について余計な詮索をするな。かな?言つとすれば。』

「それだけですか?」

『それだけだ。会談するなら日程を教えてください。・・・ああ、実際に楽しみだ。』

と挑発して、鯉斬さんは通信を切った。

「これやから、地上本部の人間は嫌いなんや・・・」
（はやてside out）

ファーストアラート 前編（後書き）

最初に事件で鯉斬の立場があやふやになってきました。さて、どうなるやら……。

あ、言うておきますが、『覚醒セシ者』で出た最初の会話はメガロではありませんよ？

海竜神……鯉斬が体の中に宿す者。正式名称はリヴァイアサンだが長いので別の名で呼ぶこととなり、愛称はメガロ。

ファーストアラート 後編(前書き)

ファーストアラートはこれで終わりです。
この先のお話はしばらく鯨斬のターンです。

ファーストアラート 後編

（スバルside）

無事、私たちがリニアに着地出来た時に八神部隊長と鯉斬さんの通信が終わり、リイン曹長が降りてきた。

「まったく、鯉斬さんにはあり得ないんですよ。」
「とら立ちを呟いていたが、すぐに切り替えて私たちに任務の説明を行った。」

「では、今回の任務はスターズのお二人とライトニングのお二人が前後から進み、七両目の重要貨物室から“レリック”を確保することです。・・・私はリニアの制御を奪い返しますので、四人で頑張ってもらいます。途中、ガジェット妨害などがありますので、気を付けてください！」

「・・・はい！！」「・・・」
そのとき、この車両の真下に居たガジェット達が天井に向けて撃ってきた。

「うおおおおお！！！」

ドゴオン！

ガッ！

「でえええええい！！！」

《Wing Lord》

「わわっ！！！」

私は中に居たガジェット数機を破壊し、その反動で外に投げ出されたとき、足元にウインググロウドが出現し、それを走ることによって再びリニアの天井に戻る事が出来た。

「・・・マツハキャリバー？」

《どうしました？》

「今のはマツハキャリバーがやったの？」

《そうです》

「凄いよ、マツハキャリバー！！」

《私はあなたをより強く、より速く走らせる為に作り出されました》
「・・・マツハキャリバーはA Iで動いてる“デバイス”だけどさ、私はそういう風に考えないで“相棒”って考えてるんだ。」

《“相棒”ですか？》

「うん、私もマツハキャリバーも雛鳥なんだからさ、一緒にレベルアップしていこうよ！」

《・・・そうですね。》

そんな話をしながら、目的地まで進んでいった。

〈スバルside out〉

〈ティアナside〉

私はスバルが破壊した後、車両内を進んでいた。

「しっかし、貴方達は凄いわね。」

《お褒めに預りて光栄です。》

「本当は私のような“凡人”は貴方のような優れたものには頼りたくないんだけど・・・」

《要りませんでしたか？》

「だけど、共に現場を駆けるパートナーだし、頼りにしてるわよ？
クロスミラーシユ。」

《任せてください》

その時目の前に立ちはだかってきたガジェット達は一列になって襲いかかって来た。

「クロスミラージュ!!!」

《バリアブルバレット!!!》

「バリアブル・シュート!!!」

ズ・ガガガガン!!!

一列になって襲いかかって来たガジェット達は一発の弾丸によって貫通され爆発した。

「この調子で行くわよ!」

《イエス、マスター》

〈ティアナside out〉

〈エリオ・キャラospace〉

僕たちも無事着地した。

リン曹長の話も聞き、途中何機かガジェットを破壊したが大きな怪我はなく順調に進んでいた。

だけど、目的の重要貨物室前の車両に着いた時、今までとは見たことのないガジェットが現れた。

「大きい!」

「エリオ君!!!」

「大丈夫!」

「でやあああ!!!」

新型のガジェットにぶつかる瞬間、AMFが発動し、魔力刃が掻き消されてしまった。

そして、後ろにいたキャラのところまで届いていた。

「くっ！AMFの範囲が広い！！」

「これだと、ギリギリ届かないところから撃つしかないけど、そんなことをしても威力は無くなる・・・。」

「やっぱ僕が一気に近づいて、斬るよ・・・！！」

と十分に距離を離していた二人だったが、新型ガジェットのアームが二人を襲った。

キャラはそのまま後ろに下がったが、エリオはキャラが後ろに居た為、防御するしかなかった。

「エリオ君！！」

「ぐう！！」

エリオは必死に投げ飛ばされないように抵抗しているが、それも限界だった。

新型ガジェットはアームを槍に巻きつけ、そのまま壁に叩きつけた。

「があ！」

「・・・」

新型ガジェットは邪魔者をこの場から排除しようとエリオを車両から投げ飛ばし、エリオはそのまま崖下に落下していく。

キャラは、無意識にエリオの元に向かって行った。

「（護りたい。）」

私の行き行く場所は常に安定した場所ではなかった。

自分が持つ力に振りまわされ、そのたびに居場所を追われていた。

だけど、最後に辿り着いた場所はそんな操れない力があっても、気さくに手を差し伸べてくれる場所だった。

だからこそ、護りたい私に手を差し伸べた人を・・・護りたい！！

「今まで、辛い思いをさせてごめんね。・・・フリード、いくよ！」
「きゅる〜!!」

『竜魂召喚!!』

『蒼穹を走る白き閃光、我が翼となりて天を翔けよ。来よ、竜フリードリヒ。竜魂召喚!!』

と力強く、唱えた瞬間、小さかったフリードは本来の姿になって、リニアの横に付きながら、空を飛んでいた。

「・・・うん？」

「よかった、目を覚ましたんだ。」

「わわっ!? キャロ、それにフリードまで。」

「行こう、エリオ君。ガジェットと一緒に倒そう。」

「うん。まずはあの装甲をどうにかしないと・・・」

「エリオ君はあのガジェットを倒すことに集中して。」

『我が請うは白銀の剣、若き槍騎士に祝福の光りを』

《Enchanter : Field invalid》

『猛き、その身に力を与える光りを』

《Boost up : Strike Power》

『《Twin Boost : Slash and Strik

』e》

その力を受け取ったエリオとストラダは一気に新型ガジェットの懐に潜り込みAMFを破壊した。

「一閃！必中！！」

「どりゃああああ！！！！」

キャラとキュリケイオンで強化された槍はガジェットに突き刺さり、そのまま一刀両断された。

「エリオ・キャラ side out」

「鯉斬 side」

スバル達の初戦闘が終わり、力を使うことに躊躇っていたキャラは無事に力の制御も出来、“レリック”も無事に回収できたらしい。だが俺は見守っていた時、空に浮かんでいるサーチャーを見つけた。このサーチャーはステルス性能が付いている為、そう簡単に見つからないが、コレを作成したのが俺とアイツだったからだ。俺はこのサーチャーをなのは達に見えないように回収した。そして、カメラ越しに……。

「鯉斬 side out」

「????? side」

「……刻印ナンバー9が護送されましたが、追加戦力を送りますか？」

「いや、いいよ。今回はこの子達が見ただけでも良しとしよう。」
「と言って、画面には先程私が作成したガジェットを破壊していく機動六課のメンバーが映っていた。」

「……フフ、『Fシリーズ』がまだ居たとは……そして。」

再び画面が代わり、映し出した人物は黒と蒼のBJを着た人物だった。

「・・・まさか、鯉斬さんがこの部隊に居るとは・・・縁があるんじゃないんですか？ドクター」

「そうかもね。ウーノ。」

その時、サーチャーの画面がブレ、直った時にはある人物がカメラ越しの僕達に向けて言い放った。

『一体何をしてやる？・・・ジエイル』

（ジエイル side out）

ファーストアラート 後編（後書き）

今回は新人四人達のそれぞれの戦闘描写にするつもりだったんですが、エリオとキャロだけは難しかった。

そして、最後に鯨斬の友人であり、仲間でもあるジェイルの登場。

ここ最近、思った事。

エロネタやギャグを書いていると、シリアスが凄く書きづらい！

訪問（前書き）

いやあ、二日も空けて申し訳ない。
一気に投稿じゃー！ヒヤッハー！

訪問

（鯉斬 side）

「一体何をしてやる？……ジエイル」

そういつた俺は覗きこんだが、一方通行の会話だと思いだし、そのまま続けた。

「これを使ってお前のところ行くから、待ってる」

そう言つて、サーチャーをなのは達にバレないように隠した。

その後、すぐにはやてから通信が来た。

『鯉斬さん、ご苦労様でした』

「おう。現場の保存とかは誰がやるんだ？」

『ライトニングの二人がやります』

「なら、俺は用があるから先に離脱していいか？」

『一体どこへ？』

「……上司のところだ」

『分かりました。あとはこちらでやっておきます』

「じゃ、通信終了」

ピッ……

「なのはにフエイト、俺は寄るところがあるから先に出るぞ！」

「へ？」

「じゃあな！」

「あ、ちょ、鯉斬？！」

そう大声で叫んだ後、その場を離れた。

（鯉斬 side out）

＼ジエイルside＼

彼がこの場所に来ることを知った私は、準備をしていた。

「ウーノ、鯉斬が来るから準備をしよう」

「準備って何をするので？ ドクター」

「何って“歓迎”の準備に決まってるじゃないか！」

そう言っただけ私は笑っていた。

「鯉斬様、すみません。止められませんでした」

そう呟くウーノはジエイルがやっていることを眺めてみることにできなかった。

＼ジエイルside out＼

＼鯉斬side＼

サーチャーの後ろを着いていく俺。

「ここがアイツの本拠地か・・・」

サーチャーは洞窟の中に入っていった。

「お邪魔しまーす！」

そういつて入った瞬間、横の壁から「ビュッ！」と何かが通り過ぎ、慌てて避けた。

「うおっ！？」

ビィィィィン・・・

矢が突き刺さっていた。

掻い潜ってやってくると思いましたが、いつまでも姿を現さず、聞こえてくるのは轟音と悲鳴の二つでした。

「あつ、ちょ、コレはやり過ぎだろ!?!」

ドガアアン!

「ヤバイヤバイ!?!」

ギユイイイイン!?!

「うおおおおおお?!?!」

ヒュツ・・・ダダダダダダダダ!

「死ぬ死ぬ死ぬ!?!」

そんな声が聞こえてきた後、罨をやつとの思いで掻い潜って来た鯉斬さんの姿が見えました。

（ウーノside out）

（鯉斬side）

「だ、大丈夫ですか?!」

「ゲフツ、効いたぜ。あ、ようウーノ」

「お久しぶりです、鯉斬様」

「“様”は付けるなって言ってるだろ?」

「まあ、癖みたいなもので・・・」

「取り敢えず、アレを仕掛けヤツはドコ行った?」

「奥に居ます」

ガコンッ……

「は？」

立ち上がるうと地面に手を付いた瞬間、手を付けた部分が凹んだ。

ゴゴゴゴゴゴゴ……

上から音が聞こえるので見てみると、とてつもなくバカでかい木製ハンマーが俺達に向けて、振り降ろされていた。

「ちよつとマテやあああああー!!」

一人ならどうにか脱出できたが、今はウーノが居るため出来ない……。

ブチッ!

「調子乗ってんじゃねえぞ、ゴラァ!!」

激怒した俺は無意識のうちに、右手に四十五口径シールドバンカー「リボルビング・ステーク」を装備して、全弾叩き込んだ。

「往くぞ、ウーノ。アイツには躰が必要だ」

「ええ、そうですね」

俺たちは頷き、奥で待っているジェイルの元に向かった。

〈鯨斬 side out〉

〈ジェイル side〉

鯨斬がこの部屋に入って来たので、クラッカーを鳴らしたがどうやら二人はそんな気分ではないようだ。

「どうしたんだい？ 二人して意気消沈して」

「解れ、バカ！ つーか、なんだあの罨の数と威力は！？」

「僕なりの歓迎だよ」

「死ぬわ、ボケ！」

「だが、実際に生きてココに居るじゃないか」

「オマエ、喧嘩売ってるんだな？ そうなんだな？ 買ってやるから表に出るや、コラー！」

「まあまあ落ち着いて、ウーノが淹れたコーヒーでも飲みたまえ」

「あ、どうも」

ズズズ・・・

「美味い。ウーノまた腕を上げたか」

「有難うございます」

「じゃ、なくて！！ コントをやりに来たんじゃねえよ、俺は！！」
自然とコントをしてしまった。

このノリについて来てくれるとは、やっぱり面白いなあ。

〈ジェル side out〉

〈鯉斬 side〉

コイツのペースに乗せられたら、話しが進まなくなるので諦めることにした。

「もういいや、疲れた」

「それよりも、久しぶりだ。鯉斬」

「・・・おう、ジェルも元気だったか？」

「まあ、妹達シスターズが居るからね、賑やかだったよ」

「ドゥーエは相変わらず、潜入中か？」

「ああ、脳髄どもの元だね」

「アイツに何か買っておこうかな、迷惑かけてるし」

「喜ぶものは何だっけ、ウーノ？」
「靴とかバツクがよろしいかと・・・」
「やっぱ、女の子だね。ウーノもな」
「そうやって、妹達シスターズを誘惑しないでくれるかな？」
「父親みたいなこと言うなよ。ところでその“妹達”シスターズは今どこに？」
「訓練場です」
「・・・それってどこにあるんだ？」
「通路の途中を左に曲がった・・・あ」。
「どうやら、気がついたらしい。
この後、何が起ころのかを。
現に遠くから悲鳴が聞こえている。」

「・・・なあ、ジエイル」
「・・・なにかな、鯨斬？」
「オマエ、罨トラップのスイッチ切ったか？」
「・・・悪いね」
「どーすんだ、アレ？」
「と言ってモニターを見ると、“妹達”シスターズが先程の俺よりも酷い状態で突破している。」

『あ、ちよ、コイツはヤバいツスよ！』
『あん、痺れる』
『くっ！ これでは突破できん！』
『うおっ?! 危な!』
『ギヤアアアアアアアア!』
あ、一人やられた。

突破した後高速でこちらに来て、ジエイルに詰め掛けている。

「ドクター!!!!!!」
「」
「」
「」

「なんですか！ あの罨は!?!」

「死ぬかと思つたツス!!」

「つーか、やられたし」

「・・・ひどい」

「何するんですか!?!」

おお、怖い。

「ちょ、ちょっと鯉斬にウーノ！ ヘルプ、ヘルプ!!!()
。()」

助けを求めるジェイル。

こっち見んな。

「どうする、ウーノ？」

「助けないで、鯉斬さんとのんびりしてます」

「だ、そうだ。俺はウーノの意見を尊重するから」

「あ、ちょ、ギヤアアアアア!!」

しばらくお待ちください・・・。

袋叩きされたジェイル。

そこによく知らない相手が居ることに気がついた妹達シスターズは訪ねてきた。

「ウーノ姉様、あの彼は？」

「この方はドクターの友人であり、『計画』の協力者でもある神海鯉斬様よ」

「神海 鯉斬だ。よろしく頼む」
じろじろ見てくる妹達シスターズ。

なんですか？

「ほら、あなた達も自己紹介しなさい」
「・・・トールだ」
「クワットロよん、よろしく〜」
「チンクです」
「セインです」
「セツテです。よろしくお願いします」
「僕は・・・オットー」
「・・・ノーヴェ」
「・・・デイエチ」
「ウエンディッス！」
「デイドです。よろしく」
と順番に挨拶する。

「鯉斬さんは・・・どんな方なんですか？」
「というと？」
「管理局の方ですか？」
「まあ、そうなるな」
「「「「「「つ?!」「」「」「」
「そう、構えるなよ。確かに管理局の人間だが、お前らが想像して
るタイプじゃないぞ？」
「どういうことだ？」
「簡単だ、トール。俺は管理局に復讐する人間だからだ。大体、『
計画』の話を持ちかけたのは俺だしな。もっとも、同じことを考え
ていたがな」
「・・・そう言えばそうだったね」
「ジエイル、起きたのか」
「いや、結構効いたよ」
「自業自得だ」
「というか、俺達最初なんの話をしてたんだっけ？」
「なんだったかな？ ウーノ」

「確か、ドゥーエのプレゼントの話だったはずですが・・・」
「ああ、そっぴやそっぴだった。なんでこんなに話しが脱線してんだ？」

「全てはドクターの悪ふざけが原因ですね」

「ウーノ・・・お前苦労してるな。お前にも何か買っておくよ」

「有難うございます」

全く状況が読み込めない妹達シスターズであったが、たった一つの単語を聞きとった瞬間、話しに入りこんできた。

「ウーノ姉様と誰にプレゼントするんですか？」

「なんだ、いきなり？」

「鯉斬兄も甘いツスね！ 私たちは女なんですよ？ それぐらいは気にするツスよ！」

「鯉斬兄？」

「なんか、お兄さんって感じがするんすよ。だから、鯉斬兄と呼ばせてもらうツス！」

とウエンディはフレンドリーに呼んでくる。

それを聞いた他の奴らも頷いていた。

「あー、確かにそれ、分かる気がする」

「・・・確かに」

「・・・ウーノがオシャレして、鯉斬さんがスーツとか着て夜の街を歩いていたら、恋人っぽく見えるしな」

とトーレですら言う始末。

その光景を想像したウーノは顔を赤くし、他の奴らも自分たちに当てはめて想像してるようだ。

「本当に誘惑しないでくれよ？ 鯉斬」

「俺はなにもやってねえ！！」

「・・・と、ところで鯉斬様は今日の予定は？」

「もう何も無い筈だ……。三日間ぐらい暇だな」

「なら、ここで暮したらどうだい？」

「マズイだろ、それ」

「僕やウーノは構わないよ。……キミたちは？」

「ドクターがいいなら構わないです」

「じゃ、決まりだね。……ちなみに彼はこんなナリでもガジエッ

トを素手で破壊するから、気を付けてね？」

「」「」「え」？」「」「」

「……見てたのかよ。まあ多少は鍛えてやるよ」

（鯨斬 side out）

こうして、俺は三日ほど、ここで暮らすこととなった。

訪問（後書き）

戦闘機人であるシスターズでさえ、驚きの戦闘法。

原作ではノーヴェ達はもっと後に、出てくるはずですが、この物語は早くから登場です。

・・・オットーとディエチの口調が分かんねえ。

強化

（鯉斬 side）

うい、鯉斬だ。

あれから二日が経ち、妹達もだ**いぶ鍛え**られているよ。シスターズ

といつても、俺の牙や岩石をブン投げたり、レイヤード・クレイモアを片っ端からぶっぱしてるのを避けたり、受け止めたりしてるだけなんだけどね。

ちゃんと、ソレを避けて接近戦もやってるけど、俺の元に辿り着くまでにほぼ力尽きてる感じの為、まともな接近戦はほぼない。

時折、「手を抜いて欲しい」と言われたが、「手を抜いたら鍛える意味がないだろうが、バカ共」と言ってそんな願いを一蹴した。

「……………さて、今日もここまでだ。ちゃんと体を休めるよ」

「……………あ、有難うございました……………」

「おう。ご苦労さん」

ウーノを除くシスターズはいつものようにぐったりしていた。

俺は部屋を出て、ジェイル達が居る部屋に向かった。

「ジェイル、居るか？」

「おや、訓練は終わったのかい？」

「ああ、今終わった」

「毎度のことながらスパルタだね、キミの訓練方法は……………」

「何を今更なこと言ってんだ、お前は……………」

「ところで、なにか僕に用があったんじゃないか？」

「おお、そうだった。……………ちょっと、強化してもらいたいんだが出来るか？」

「内容によるが……何をだい？」

「……俺の特殊武装を強化してもらいたい」

「特殊武装って言うと、あの武装かい？」

「ああ、俺が頼むのは“武装融合”だ」

「武装融合？」

「俺の持つ『パルチザン・ランチャー』ってあるだろ？ アレは魔力弾と質量兵器の複合体だ……そこで俺はそれを一つずつに分けて他の奴とくつつける事は出来ないのか？ とね」

「なるほど……面白そうだし、なにより科学者として血が騒ぐ！」

「じゃあ、やってくれるか？」

「もちろんだとも！！で、融合させる武装は何かな？」

「まず『パルチザン・ランチャー』を二つに分ける」

「それは、デバイスを壊すんじゃないのか？」

「いや、それがどうも違うらしい。ジョーカー」

《OK・モード『ヴァイスリッター』！！》

ジョーカーが呼び出すと、何もないとところから転送される形で出現した。

「なっ！？いきなり出現した?!」

「どうやら、この特殊武装は別空間に保管してるらしく、そこから取り出されるらしい。……俺もここ最近ようやく知ったんだ」

「ふむ……これならいけそうだね」

「そうか、次に融合させる武装だが質量兵器の方には 四十五口径『リボルビング・ステーク』を魔力弾の方には『グラン・スラッシュユリッパ』の刃を弾丸に変えて、後、銃剣にして欲しいんだが……出来るか？」

「……早くて二日、遅くても三日くれないか？」

「別に構わないぞ」

「なら、詳細を詳しく話してくれ……」

「ああ……」

そう言つて、俺はジエイルと共に研究室に向かった。

おっと、いけない伝え損ねていた。

「ウーノ！」

「はい、なんでしよう？ 鯉斬さん」

「アイツ等が来たら、食堂に行けと伝えてくれ。料理を創つておいた、あと、ウーノにもすぐそこに置いてあるよかったら食べてくれ！！！」

「有難うございます、伝えておきます」

そして、今度こそ俺は研究室入った。

〈鯉斬 side out〉

〈ジエイル side〉

先程訓練を終えた鯉斬が私に頼みごとをしてきたので聞いてみた。

「なにか僕に用があつたんじゃないか？」

聞いてみると、どうやら鯉斬の特殊武装を融合させたいと言つてきた。

でもそれはデバイスを壊す行為のではないのかと思ひ、訪ねてみるとどうやら違うみたいだ。

「ふむ…… これならいけそうだね」

これは凄い！

こんなことが出来るなら、“武装融合”も出来る筈だ!!
さっそく取り掛かるべく、研究室で詳しい武装内容と強化する部分
を聞きながら改造しよう。

そこから、僕と鯉斬は二日間研究室に籠りっぱなしだった。
＼ジエイルside out＼

＼ウーノside＼

鯉斬さんとドクターが研究室に籠った後、妹たちはやってきた。

「あれ、ドクターと鯉斬兄は？」

「あの二人なら研究室よ、鯉斬さんの斬新な考えによって籠るらしいわ」

「なんですか？ その“斬新な考え”って？」

「なんでも鯉斬さんの持つ、“特殊武装”を他の特殊武装と融合させるらしいわ」

「そんなことが出来るのか?!」

「それをやる為に、あの二人は籠っているのよ。あと、鯉斬さんから伝言よ。」

食堂に行けば、料理を創つてあるから食べなさいだって」

「……………?!?」「……………」

ダダダダダダダダダッ!!!!

一人を除いて、皆は私が言い切る前にはもういなくなっていた。
少しでも多く食べたいらしく我先にといったようだ。

「まったくアイツ等と来たら……」

「あら、貴方はいいの？ トーレ」

「私にあんま空いていない」

「なら、軽くつまむ？」

そう言っつて、後ろから私よつに創られた料理をトーレに出しながら

……。

「ウーノ、これは？」

「私用に鯉斬さんが創ってくれたのよ」

「いいのか？ 私が食べて？」

「構わないわ、一人で食べるのにはちょっと、量が多かったのよ」

「なら、次回から鯉斬に言っておけば、ちゃんと創ってくれるんじゃないか？」

「そうするわ」

そうして、私たちは鯉斬さんの手料理をいつもどおりに楽しんだ。

〈ウーノside out〉

〈鯉斬side〉

二日が経ち、俺はここを帰らなければならぬが新武装の方はあと少しで出来るらしい。

「悪いが、俺はもう帰らないとさすがに怪しまれる」

「わかった、出来次第そうだな……ウーノに届けさせるよ」

「分かった……ウーノ、買った服ちゃんと着ろよ？」

「はい、分かりました」

「じゃ、トーレ達もまた会おう」

「デバイスの方は未だに預っているから、セイン送ってやってくれ」
「はい」

「クラナガンまででいいぞ」

「そこまででいいの？」

「さすがに本部まで来たら、ヤバいだろ、そっちの身が……」

「あ！ そうだね!!」

「じゃあ、また会おう!!」

「行ってきまーす!!」

そうして俺はセインに送ってもらい、クラナガンで別れ、機動六課に着いた。

その時の“お迎え”が尋常じゃなかったが……

〈鯉斬 side out〉

強化（後書き）

特殊武装の強化のお話。

そして、ウーノのキャラ方向性がおかしいような・・・

事前に連絡は入れることにしよう

（鯉斬 side）

いきなりだが、言っていていいか？

帰らせてえ……。

目の前が凄いんだよ、なんつーの？

黒いオーラが見えるんだよ、それもまだ“三人”ならよかつたんだけどね。

何か知らんが予想外の二人が居るんだ……。

なんでココにハラオウン一家が勢ぞろいしてんの？

そんなこと考えていたら、見つかった。

「あー！！ 鯉斬さんだー！！」

「ヤベっ！！」

咄嗟に逃げようとしたが何時の間にも俺の後ろにはフェイトが居た。

しかも、ソニックムーブモードで……。

オイ、それは緊急用じゃなかったのかよ？

というか、この姿のフェイト結構好みかも……。

「三日間どこに行ってきたのかな？」

「そうだよねえ、連絡なしに三日間も」

「そうやなあ、部隊長に申告無しに無断欠席、職務怠慢やなあ？」

「うおっ?!」

いつの間にか囲まれてるし！

「一応言っただんですが？ 『俺、行く所がある』って」

「でも、場所までは聞いてへんですよ？」

「そこまで教える必要がないな」

「……なんで？」

「お前らにも“誰にも知られたくない秘密” ってのは持っているもんだろ？ それと一緒だ」

「……鯉斬さんはズルイね。私たちが何も言えなくなることを武器にして使ってくる」

「なんとでも言え。……で？ そちらの二人はなんで居るんすか？」

「鯉斬さん…… 自分で言ったことを忘れましたか？ 『会談するなら日程を教えてください』 って」

「ああ。なるほど、それが今日ってことか？」

「そうです」

「なら、始めようとするかね」

なのは達の尋問をゆらりくらりかわして、本番に臨んだ。

……新デバイスまだかな？

〈鯉斬 side out〉

〈ウーノ side〉

今、私は鯉斬さんが買ってくれたら衣服を着てます。

「ウーノ姉、いいツスカあ？」

「……ええ、いいわよ」

カーテンを開けるウエンディと私の姿を一目見ようと他の妹達が集まっていた。

「「「「「おおおお~~~~!!」「」「」

「ど、どうかしら？」

「……」似合ってるよ!!」「……」

「ありがとう／＼／＼」

「……はい。これ鯨斬に渡して来てくれ。……それと少し羽根を伸ばしてくるといい」

「いいのですか?」

「たまには休みなさい」

「では、そうさせてもらいます」

「セイン、送ってあげて」

「はいよ。んじゃ、行くよ? ウーノ姉」

「ええ、お願い」

そうして私は鯨斬さんがいる機動六課に向かった。

「ウーノside out」

「リンデイ side」

はやてちゃんがいきなり呼んだ時は何事かと思ったけど、これは随分と厄介な人に嗅ぎつかれたわね。

まさか、地上本部……。しかも、レジアス中将の直属の部下の人なんて……。

気を引き締めないと一撃で持ってかれそうだわ。

「こんにちは、私がリンデイ・ハラオウン総務統括官です」

「そして、僕がクロノ・ハラオウン提督であり執務官だ」

「どーも」

軽い気持ちで挨拶している割には隙がないわね。

「自己紹介ぐらいしなよ、鯨斬」

「ウイ。元地上本部で“レジアス中将の部下”でもあった神海 鯨

「斬少将です」

とワザと一部だけ強調して言ってきた。
舐められてるわね……………。

「どうも御親切に」

「いえいえ、お気になさらず結構ですよ？」

どこまでもおちよくろうとする態度にクロノは我慢しているわね。
……………これは、近いうちに爆発するわね。

「ま、何時までも雑談ばかりしているわけにはいかないし、本題に入りましょうかね？」

「ええ、そうね。……………では鯉斬さん、貴方はどこからこの部隊設立のことを知りましたか？」

「直球ですね。変化球が来ると思ったんですが……………」

「貴方に変化球なんて投げたら、投げ返されるのが目に見えていますからね」

「ふむ。どう答えようかね？」

「障りの無い答えで結構ですよ？」

「そうですね……………。どんな組織でも大きくなるほど情報の管理は皆さんになります、そこから情報を得た。とでも言っておきましょうか……………」

「……………なかなか意味深な言い方してくれるじゃない」

「お褒めに預り、恐悦至極です」

「では、他には？」

「そう簡単に言うと思いますか？」

「……………でしようね」

「俺は貴方達が知られたくない情報が武器になるんですから、持っているだけでも充分牽制にはなる。……………違いますか？」

「ええ、そうね」

「母さん！ 認めるなんて!!」

「クロノ。ここは認めましょう。言い争えばこの人を有利にするだけだわ」

「そうだぞ、クロノ？ 成長したと思ったんだが、まだまだ甘いな」「なんだと?!」

クロノを怒らせてさらに情報を引き出すつもりね。

「今、ココでキミを解雇することも出来るんだぞ?」

「おやおや、脅しですか。まあ、別に解雇してくれても構いませんよ? ただ、私を解雇したら“予言”を止めるのは大変でしょうね」

「……………?!」「……………」

何故、“予言”の事を彼は知ってるの?!

あの“予言”は限られた者しか知らないハズなのに……………これは不味いわね……………。

〈リンデイス ide out〉

〈鯉斬 side〉

おーおー、“予言”のこと言ったら皆吃驚してるよ。

「なんで知ってるんだ?」みたいな顔をしゃがって、俺これでもレジアスの部下だったんだぜ? 知らないわけなからうが。

「おっと、口が滑ってしまいました。今のは忘れてください」
そう言っても凄く睨んでくる五人。

「キミはどこまで知ってる!? 内容によっては……」

「内容には何だった?」

「今のキミには理由は分からないがデバイスがない。黙らすことも

…「調子に乗るなよ」……っ!?!?」

「(メガロ、合図を待て)」

『ああ。分かった』

メガロに喰わせる合図を待たせてクロノと対峙する。

「調子に乗るなよ、小僧! テメエ等が有利とか思ってたんなら大間
違いだぞ!?!?」

「なんだと!」

「テメエ等はすでに喰われそうになってんだぞ? 航空ガジェット
の大群をたつた一回で屠った海竜神を相手にお前は勝てるのか?」
そういうとリンディ、クロノを除く三人は動きを止めてしまう。

「なのは達は知ってるよなあ? アイツの大きさや破壊力を」

「……コクコクコク………!!」

無言で頷く、三人。

三人の見慣れない動きからリンディ達は動けずにいた。

そのまま、気まずい空気が流れると、この部屋に一人の女性局員が
入って来た。

「神海 鯉斬少将は居ますか?」

「あ、はい。何ですか?」

「少将に面会したい方が来ます。………若い女性ですよ」

「分かった、すぐ行くから。場所は?」

「ロビーです」

「分かった。「五分ほど待ってくれ」と伝えてくれ」

「分かりました。では、失礼します」

女性局員は要件を伝えると去っていった。

「会談をこちらから始めたのに悪いが、今日は人と会う予定が会ってな。悪いが失礼する。……そうだ、悪いがはやて。俺は上がらせてもらっぞ」

部屋を出ていったあと、俺は私服に着替えてウーノの元に向かった。

〈鯉斬 side out〉

〈フェイト side〉

私は女性局員のある言葉に聞きとめた。

『若い女性』

鯉斬が知らない女性と会う……………。

何故か知らないけど、凄く興味がある！！

なのはたちを見てみると二人も同じようだ。

お母さんは面白いネタを見つけたと言わんばかりの表情をしていた。

お兄ちゃん……………未だに機嫌が直らないらしい。

「えーと、私も用事を思い出したので失礼しますッ！！」

そう言っただけで鯉斬の後を追った。

〈フェイト side out〉

フェイトが出て言った後にさらに大きな集団が付いていく姿を見たのは言うまでも無いことだった。

事前に連絡は入れることにしよう（後書き）

もうウーノが原作乖離している気がする・・・

ところでクロノってStSでは執務官と提督どちらでしたっけ？

知っている方いますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8869u/>

魔法少女リリカルなのはStrikers ~ 血塗られし王 ~

2011年10月13日13時52分発行